

## 四旬節第五主日

2014.4.6

ヨハネ 11・3-7,17,20-27,33b-45

先週の月曜日と翌々日の水曜日には、井田照子さんと小林孝子さんのご葬儀がこの聖堂で営まれました。お二人とも最後は長いことホームに入所されておられました。お子さんがおられなかった高齢のお二人は甥子さんが喪主となられ、近親の方々、それにお元気な頃のお二人と親しくしてこられたり、お訪ねしてくださっていた教会のお友だちの皆さんに見守られて神さまのみもとに旅立たれました。

「心を騒がせるな。神を信じ、わたしをも信じなさい。わたしの父の家には住むところがたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる」。葬儀のミサの中で朗読されるこの主のみことばをお二人は何度もお聴きになっておられたことでしょうか。洗礼を受けてカトリック信者となるということは、このみことばの主であるイエス・キリストというお方を信じ、このみことばに自分の生涯を委ねて生きるということです。

「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい」とイエスは言われますが、洗礼を受けて信者になってからも、この世の人生においては、井田さんにとっても小林さんにとっても、心を騒がせざるを得ないようなことが沢山おありになったことでしょうか。私たちも皆それぞれに、心を騒がせざるを得ないようなことを負って生きています。そのような私たちの心に今日の福音のみことばは、どのように響いているのでしょうか。

「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」。今日の福音のマルタとマリアのこの嘆きの訴えは、私たちの訴えでもあります。私が信じているイエス・キリストはいてくださらない、私の願いを聴いてくださらないという思いに私たちもしばしば打ちひしがれます。確かに、このような経験によって私たちの信仰は脅かされています。けれども、まさに、このような経験によってこそ、私たちの信仰は試されるのです。

今日も私たちはこうして、十字架の死に打ち勝って復活されたイエス・キリストへの信仰に結ばれて、その信仰に招き入れられたことを感謝してこのミサをささげています。そのような私たちの中にイエスは来てくださり、今日もその福音のみことばを聴かせてくださるのです。「わたしは復活であり、いのちである。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者は

だれでも、決して死ぬことはない。このことを信じるか」。洗礼を受けてカトリック信者となった私たちに、十字架の死を越えて復活されたイエス・キリストは、今日もこのように問いかけておられるのです。イエス・キリストを救い主と信じるということは、今日の福音の姉妹のように嘆き訴えざるを得ない私たちにこのように言われるイエスを信じるということです。

イエスが来られることを待ち続けていたマルタとマリアのもとにイエスが来てくださったのは、ラザロが死んでしまってから四日経ってのことであったと今日の福音には語られています。四日経ってというこの日付にこだわりたいと思います。このことにはどのような意味があるのでしょうか。

福音書という書物は、復活されたイエス・キリストとの出会いを経験した弟子たちの宣教によってはじまった教会の信仰の中で生み出され、その信仰を伝えるために書かれていると言われていています。そのような弟子たちから始まる教会の信仰の中で、今日の福音の出来事も語られているのです。そのように理解することによって、私たちは今日の福音が私たちに語ろうとしていることを受け止めることが出来るのです。私たちは教会の信仰の中で、十字架に架けられて死に、墓に葬られたイエス・キリストは三日目に死者の中から復活されたことを信じています。今日の福音に語られているラザロの復活は、三日目に死者の中から復活されたイエス・キリストによって、四日目にラザロにもたらされたものであると告げているのです。このような理解は、あまりにも奇抜に思われるかもしれませんが、このように理解することによって、福音書が語るイエス・キリストの復活という出来事は、はじめて私たちに関わるものとなるのです。十字架の上に死に、墓に葬られたイエスは三日目に死者のうちから復活されたということを信じるだけなら、イエスのその復活は私たちとどのような関わるのかということが理解出来ないのではないかと思います。

「わたしは復活であり、いのちである。わたしを信じる者は死んでも生きる」という今日の福音のみことばは、復活されたイエスのみことばです。そのみことばが真実であることを、今日の福音はラザロの復活という出来事を語ることによって私たちに示しているのです。福音書の中でここだけに登場するラザロをイエスは愛しておられたと語られています。生前のラザロについては、これ以外のことは何も語られていません。ラザロを愛しておられたイエスは死んで墓に葬られたラザロのもとに来てくださって、彼の死を嘆き悲しむ人々ともに涙を流されるのです。ラザロが生きていたなら、ラザロにとっては、これだけで十分だったはずです。自分を愛してくださったイエスが自分の死を悲しんで涙を流してくださったということを知ったなら、ラザロは安んじて永久の眠り

につくことが出来たことでしょう。私たちはこのようにして愛する者たちの永久の安らぎを祈って、悲しみのうちに愛する者たちを見送ります。けれども、今日の福音に語られていることは、そのような悲しみのうちに終わりを迎える私たちのこの世の人生を根底から揺さぶります。ラザロの墓の前に立たれたイエスは、人々ともにラザロの死を悲しんで涙を流されるだけではなく、心に憤りを覚え、「もし信じるなら、神の栄光を見られると言っておいたではないか」と言われるのです。そして、そのみことばのとおりにはラザロを墓の中から蘇らせてくださるのです。

十字架の上に死に、墓に葬られたイエス・キリスト、しかし、三日目に死者のうちから復活されたイエス・キリストを信じて、洗礼を受けた私たちは、愛する者たちの死を、そしてやがて訪れる自分自身死をどのように受け止めようとしているのでしょうか。私たちの生涯は涙とともに悲しみのうちに閉じられようとも、まさに、その悲しみを通して、私たちは神の栄光を仰ぐことになるのです。「わたしは復活であり、いのちである。わたしを信じる者は死んでも生きる」。今日の福音のこのイエスのみことばが、いつかは迎える私たちの死を切り開くいのちのみことばとなることを願いたいと思います。布に包まれたまま墓から出てきたラザロに、「ほどいてやって、行かせなさい」と言われたイエス・キリストが、私たちを死の束縛から解放してくださることを願いたいと思います。「生きていて、わたしを信じる者はだれでも、決して死ぬことはない」。このように言われるいのちの主であるイエス・キリストを信じて、洗礼の恵みに与った者たちとして、私たちが生きるこの世の人生が、信仰者にふさわしく、心騒がせざるを得ない諸々のことから解き放たれたものとなってゆくことを祈り求めたいと思います。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高